離宮のタルト

丸尾　聡

「甘さ」とはいったいなんだろうか。
考え始めるきっかけとなった「自分の体質」に、取りあえずの感謝を。

登場人物

宇山
涼子
オーナー
吉本

カレーム（菓子職人）
ミラボー（伯爵）
ランバル夫人　（宮廷女官長）
ベル（農場の娘）
サリー（農場の娘）
マシャロ（王の菓子職人・宇山と二役）

バーデル（白人の監督）
ジェローム（奴隷）
エメー（奴隷）
マカンダル（奴隷）
テレマック（奴隷）
アイダ（奴隷）
マルゴ（奴隷）
ラセット（総督・オーナーと二役）
マボ

この芝居は、次の三つの場所、時代が舞台となる。

○現代の日本
糖尿病のパティシエと味覚障害の女が暮らすマンション。

○フランス　１８世紀フランス革命直前。
マリー・アントワネットが暮らした離宮、プチ・トリアノーン。

○西インド諸島　フランス植民地時代
砂糖プランテーションが置かれたカリブのある島。

0

女（涼子）が望遠鏡で彼方を見ている。
男（宇山）がいる。卵白を泡立てている。メレンゲを作っているのだ。
やがて涼子、望遠鏡で宇山を見た。

1

場違いな感じがする蓋のついた箱。中の砂糖を涼子が指ですくって、落ちる様を眺めている。マンションの一室であるらしい。どこか寒々しい。夜。机と椅子。宇山、いつもの「深夜のティーパーティ」の準備をしている。紅茶とイチゴのタルトが並べられる。二人分。

宇山　用意できたよ。
涼子　ありがとう。

涼子、タルトを見ている。

宇山　遅くなった。まだ何も食べてないんだろ。食べようよ。

涼子　今日は赤い。
宇山　季節だからイチゴ。店でもよく出てるよ。
涼子　お店のタルト？
宇山　いや、作ったよ。
涼子　宇山さん。
宇山　なに、涼子。
涼子　毎日、ありがとう。
宇山　なにが。菓子屋は新作作らないとあきられるんだ。そうすれば、クリスマスとか入学式とかバレンタインとか、誕生日とか、イベントごとにみんな買ってくれる。いつかお店で出すために、そういうことだよ。

涼子　甘いもの、みんな好きだから。
宇山　ああ。そうだ。
涼子　わたしも、もしかすると買ったりしたことがあったのかな、お菓子。あなたの店で。
宇山　・・・食べてくれよ。
涼子　うん。・・・宇山さんは、今日は？

宇山は手帖を見る。糖尿病患者で、炭水化物を、つまり甘みを制限されてインスリンを打っている宇山が、日々の食事内容を書き記している手帖だ。今日一日に摂取した炭水化物と、そのリミットとを確認している。

宇山　今日はずいぶん食べてるから・・・
涼子　・・・
宇山　でも、食べるよ。
涼子　いいよ、わたしにあわせなくても。
宇山　一口なら大丈夫。
涼子　・・・。
宇山　自分の体のことだから大丈夫だよ。明日、店の味見は吉本にやらせるから。あいつ少しできるようになって来たし。相変わらずふらふらしてるけど。

宇山、慎重に分量を考え、タルトを食べる。

涼子　おいしい？
宇山　うん。
涼子　甘い？
宇山　甘い。
涼子　頂きます。
宇山　うん。

涼子、タルトを食べる。少し様子がおかしい。

宇山　涼子・・・
涼子　大丈夫。食べられる。
宇山　・・・
涼子　ごめん。イチゴはちょっと無理かもしれない。
宇山　特別な、完熟の、ずいぶん甘いイチゴをつかったつもりだけど・・・、やっぱり、苦い？
涼子　・・・うん。
宇山　無理しなくていい。下のクリームとタルト台だけでも食べなきゃ。
涼子　うん。・・・ねえ、人って食べないと死んじゃうんだよ。

涼子、食べる。

宇山　最近、増えてるんだって言ってた。店で吉本が。ああ、テレビでやってたって。
涼子　わたしみたいな人、いたのかしら。
宇山　ああ。いたみたいだ・・・。アメリカ、だったかな。同じこと言ってた。
涼子　苦みは、舌が曲がるみたいで、酸っぱいのは舌がしびれて、辛いのは焼けるみたいで。
宇山　・・・うん。で、野菜とか、イチゴみたいな果物もダメだって。敏感すぎるってのも困るよな。
涼子　甘さは？
宇山　その人は・・・、甘さだけは普通に感じるらしい。
涼子　そう。
宇山　それで、クッキーとかチョコレートケーキとか、いつもお菓子を食べてるって。
涼子　同じだ。
宇山　うん。
涼子　でも、わたしもわかったらよかったな。
宇山　お医者さんも言ってたよな。涼子みたいなのは珍しいって。甘味だけ感じないのは。でも、あるとき突然治ることもあるって・・・いってた。俺なんか一生こうなんだから。
涼子　・・・
宇山　さあ、食べてくれよ。
涼子　・・・砂糖をね。
宇山　え。
涼子　砂糖を口に入れるでしょ。
宇山　うん。
涼子　いつも思うの。今日は違うんじゃないか、って。口に入れて、それが溶けて、広がって、舌から神経を伝わって脳に届いて、甘い・・・頭がしびれるみたいに。

宇山　・・・
涼子　そう、今日は思えるんじゃないかって。砂つぶを口に含んだみたいじゃなくて。
宇山　涼子。
涼子　でも、あたしの実際は・・・、何を食べても色の調整を間違えたカラーテレビみたいなのに、甘味だけ白黒写真みたい。ぼやけてる。遠くにある。
宇山　・・・。
涼子　ねえ、甘いって、どんな感じなの？

繰り返されてきた二人の会話である。涼子は「超味覚」というどの味覚も過敏に感じてしまう体質でありながら、「乖離性味覚障害」という甘みだけは感じない味覚障害でもある。彼女は甘みを感じないが、食せるのは甘みだけである。そして、彼女には宇山と会うまでの記憶がない。

涼子　宇山さん、教えて。
宇山　幸せな感じ。
涼子　そう。さむーい日にあったかいお風呂に入るみたい？
宇山　ああ、そうそう。
涼子　それで。
宇山　それで・・・、
涼子　これが、そう？（目の前のタルト）
宇山　ああ。
涼子　パティシエになりたいと思った時の話、聞かせて。
宇山　もう何回も話しただろ。
涼子　いいから聞かせて。メレンゲの話。
宇山　お菓子は魔法だから。
涼子　うん。
宇山　・・・
涼子　・・・

涼子、立ち上がって望遠鏡を手にとり、遠くを眺めた。

涼子　（望遠鏡で眺めながら）どうして、わたしは甘さだけ、わからないんだろう。あなたといるのにね。
宇山　・・・
涼子　お店のショーウインドー。遠くから望遠鏡で見た。初めて会った日。今のわたしが始まった日。
宇山　うん。
涼子　いろんな色のお菓子。赤いのや白いのや黄色いのや緑色、黒いのもあった。きっととても甘いのね。そう思えた。あなたのお菓子。あなたは、

宇山　わたしに作ってくれた。あの日は、白いタルト。でも・・・
涼子　なあ。俺の作ったタルト食べてくれ。
宇山　食べてるよ。
涼子　そうだ。でも、そうじゃなくて・・・
宇山　変だよねえ。甘さがわからないのに、だから甘いものしか食べられないわたしと、甘いものを作っているのに、それが食べられない宇山さんと、ねえ。

涼子、望遠鏡で遠くを見つめて。宇山、涼子を抱きしめる。

宇山　涼子。
涼子　甘いって、なんだったのかしら・・・。
宇山　・・・。
涼子　先に、ベッドに行っているね。

涼子行く。宇山、一人残る。そして、残された望遠鏡をのぞいてみる。フランスが流れこんできた。

2

砂糖の箱がある。そこから砂糖を取り出し、男が卵白に合わせた。男はカレーム。メレンゲをつくっているのだ。田舎の田園風景をそのまま取り込んだような場所。奥に厨房があるらしい。その外に置かれた机と椅子。娘が二人やってくる。笊に入れた卵と絞った乳を入れるための缶をもっている。サリーとベル。フランス。ヴェルサイユ宮殿から少し離れた王妃マリーアントワネットの離宮。プチトリアノーンの一角。敷地内の劇場からオペラの音楽が聞こえている。１７８０年。

サリー　おはよう。カレーム。
カレーム　サリー、おはよう。
ベル　ああっ、メレンゲを作っているのね。
カレーム　ああ、そうだよ。ベル。おはよう。今、やっているオペラがもうすぐ終わる。そうしたら王妃様が、ご自分でメレンゲをお焼きになるそうだ。
サリー　へえ。ご自分で。ここにいるときの王妃様は王妃様じゃないみたい。
ベル　ねえ、カレーム、お願い。あとで、この卵を使って私たちの分もメレンゲを作って。
サリー　焼きメレンゲが口の中で溶ける時の感じ。
ベル　大好き。
カレーム　それはダメ。

ベル　どうして。だって自分でやると腕が棒みたいになっちゃうんだもの。それに時々膨らまないし。
カレーム　それ。
ベル　え。
カレーム　それは生みたての卵だろ。メレンゲを作るには、少し古い卵がいいんだ。うちの師匠なんか腐る寸前くらいの古い卵がいいっていうよ。新しい卵は膨らまないのさ。
ベル　それでだったのね。
カレーム　それだけじゃないよ。天気によっても違う。今日ならアトリエの中より、ここのほうが上手に出来る。砂糖も何回かに分けていれなきゃダメだし、泡立て方もね。
ベル　へえ。
サリー　不思議なの。わたし、卵の白身に砂糖を入れて焼いてみたの。ちっとも美味しくなかった。同じ材料なのに。
カレーム　小麦粉、卵、バター、そして砂糖。お菓子の材料は決まっているけれど、分量やあわせかたで全く違うものができるんだ。お菓子は魔法さ。その配合は、菓子職人だけの秘密だけどね。
ベル　やっぱり、カレーム作って。
カレーム　いいよ。
サリー　ありがとう。
カレーム　もう、ベルには甘いんだから。
サリー　その甘い焼きメレンゲ。サリーの分は作らなくていいの？
カレーム　だめ。だめよ、そんなの。わたしたち、お菓子なんて滅多に食べられないんですもの。ああ、王妃様がうらやましい。毎日、お菓子を食べられるんですもの。
サリー　わたしたちにはわからないいろいろなお心のうちもあるんだろうよ。
カレーム　そうかしら。
サリー　華やかなヴェルサイユ宮殿を離れて、こんな場所でお暮らしなんだから。
ベル　でも・・・
カレーム　作っておくよ。メレンゲ菓子。
サリー　ああ、楽しみ。
カレーム　腐りかけ寸前の卵でね。
サリー　もう。
ベル　じゃあ、わたしたち乳を搾りにいくから。
カレーム　ああ、そうだ。自分でメレンゲを作る時は、ほんの少しワインの澱をいれるといい。固まりやすくなる。
サリー　へえ。ほんと、魔法みたい。
ベル　ありがとう、魔法使いさん。
カレーム　どう致しまして。

二人行こうとすると、望遠鏡を手にした男が登場。貴族のミラボー。

ミラボー　おお、そこに見えるのは、最近流行のメレンゲではないか。ムラングなる場所に住んでいたスイス人のガスパリーニが発明したという、卵白と砂糖を混ぜ合わせ、角が立つように膨らませたものであるな。ムラング、ムレング、ムレンゲ、メレンゲ。

サリー　だれ？

ミラボー　ボンジュール、マドモアゼル。

カレーム　ミラボー様。オペラは、もうあきられたんですか。

ミラボー　とんでもないよ、明日の「王の菓子職人」カレーム君。ウィーンから呼び寄せた連中の素晴らしい歌声は十分に堪能した。いささか喉が渇いてワインのいっぱいを求め、この王妃様の離宮、プチトリアノーンを散策していたら、ムラングムレングムレンゲメレンゲが目に入ったというわけだ。さて、今このときの「王の菓子職人」はいかがお過ごしかな。

カレーム　師匠はアトリエで悩んでいます。

ミラボー　アトリエ。絵を書いている？

カレーム　ええ、お菓子の絵を。なにか飲むものをお持ちしましょう。

ミラボー　おお、お願いしよう。君の師匠に伺いたいことがあると伝えてくれたまえ。

カレーム　さあ。次の晩餐会に出す細工菓子をどうするか。もうお菓子のことになると他のことは耳に入りませんから。とにかく伝えます。

カレーム、アトリエに行く。

サリー　ミラボー様って、貴族の・・・

ミラボー　そう。マドモアゼル。

サリー　貴族の、貴族の位を商売でもうけて買ったっていう、あのミラボー様・・・

ベル　サリー。

カレーム　(アトリエから顔を出し)そして、詩人であり、料理のご研究もされている。

サリー　さ、行きましょう。ベル。

ベル　ええ。

ミラボー　待ちなさい。

サリー　は、はい。

ミラボー　君たちは「アメリカの独立」をどう思うかな？

カレーム、お茶のセットを持って来る。

サリー　アメリカって、新大陸の。

ミラボー　そう南北アメリカ大陸、その間にあるカリブ海、すなわち西インド

諸島、これらヨーロッパの植民地、初の独立戦争だ。本国、イギリスに対して反旗を翻した彼ら新世界の住人に対し、我がフランスの王ルイ１６世は、おととし１７７８年、独立を承認、米仏同盟を締結、いまや戦線はわがほうに圧倒的に有利だ。

ベル　政治向きのことは、殿方が考えることでございますから。

サリー　それに、そんな遠い場所のこと言われてもわからないわ。

ミラボー　なるほど。では、マドモアゼルいかれるがよい。その前にわたしに甘い言葉の一言もかけてはいかがかな。

サリー　蜂蜜、ぶどう、

サリー・ベル　それから砂糖。はい、三言も。

二人笑いながら行く。

ミラボー　この離宮にまで届いていたか。近頃、パリの民衆の間で流行っている冗談が。しかし、わが民衆はいまだ目覚めず・・・

カレーム　ミラボー様。お茶が入りましたよ。

ミラボー　なに。ティー、ティーか。

カレーム　ええ、そうです。

ミラボー　なげかわしい。ここは近頃流行のカフェか。こんなところでもお茶を飲むようになるとは。

カレーム　師匠から聞きましたが、近頃イギリスでは朝食にお茶を飲むそうです。しかも砂糖をたっぷり入れて。お茶に砂糖を入れるのは発明ですね。

ミラボー　ブリテッシュブレックファースト。いまわしい。庶民の朝は、母親が作った野菜スープとワイン。こう決まっていたはずだ。それがいまや、英国ではだれでもかれでも砂糖、砂糖、砂糖だ。

カレーム　お砂糖をお入れしましょうか。

ミラボー　そうだね・・・２杯。

カレーム　はい。

ミラボー　いや、３杯。

カレーム　はい。

ミラボー　いや４杯にしてくれたまえ。

カレーム　はい・・・

ミラボー　この国では、ティーよりコーヒーのほうが好まれているようですが。王妃様も、今日のご朝食は、生まれたばかりのお子様のお顔をご覧になりながらブリオッシュとコーヒーを召し上がりました。

カレーム　ブリオッシュか。質素なものだな。宮廷での朝食に比べれば。

ミラボー　お言葉ですが、ブリオッシュは王妃様の生まれ故郷、ウィーンからわたしの師匠が王妃様のために、ここフランスに持ち込んだものです。

カレーム　砂糖を入れるとパンもやわらかくなります。

ミラボー　パンに砂糖。ティーに砂糖。なんと浪費的なことだ。砂糖は、王のた

めのものであった。そうではないか。それが、いまや・・・
カレーム　だれもが砂糖が好きなんです。
ミラボー　わたしは、そうでもない。

ミラボー、紅茶に口をつける。甘さににんまりする。

ミラボー　おお、甘い。

カレーム笑う。

カレーム　昔に比べれば、砂糖も手に入りやすくなった。
ミラボー　苦き甘さのその故にな。
カレーム　え。

「王の菓子職人」マシャロがカレームを呼ぶ声。「カレーム、カレーム、ちょっと来てくれ」

カレーム　お呼びだ。失礼します。

ミラボー、さらに砂糖を入れる。一口飲む。にんまりする。もっと入れる。

ミラボー　甘い、おー甘い。「とこしえのぶどうよりんごよそして蜂蜜よ 甘いおまえたちに世話にはなった そのことは忘れまい だが 感謝の心根が薄れていくのを許してもらわねばならぬ 新世界からきたりしありとあらゆる香辛料 食糧 タバコにティーにコーヒー 役立たずの自己満足のものばかり だが 例外がある 砂糖 砂糖 それは砂糖 我が言葉を信じよ 信じよわが言葉 おー甘い」

いつのまにか、ランバル夫人、宮廷女官長がいる。

ランバル　・・・。砂糖の詩でございます。
ミラボー　素敵な詩だこと。ミラボー伯爵。
ランバル　これはランバル夫人、いや宮廷女官長様。お褒めにあずかり恐縮致します。実は、かなり気に入っております私自身も。
ミラボー　さて、ご用事とはなんでございましょう。あなたにこんなところに呼び出されなければ、私は歩かなくてもすんだのですよ。
ランバル□　オペラは終わったようですな。
ミラボー　ええ、終わりましたとも。今日の一回目の部、マチネーはね。まったく疲れ果てました。
ランバル　ほう。わたくしでよければお聞きいたしましょう。
ミラボー　本当はあなたとだけはお話ししたくありませんが、他にどなたもいらっしゃらないのでお話しましょう。
これは手厳しい。

ランバル　ではさっさと話します。
ミラボー　さらに手厳しい。
ランバル　拍手をなさいました。
ミラボー　は？
ランバル　王妃様が。
ミラボー　なんと。
ランバル　これまでの王妃様にはなかったことです。
ミラボー　ほう、俳優たちや楽団に。終わってから拍手を。
ランバル　ええ。考えられません。あのものたちに直接拍手を。
ミラボー　まあ、ここは王妃様の宮殿ですからな。それでは、皆様も。
ランバル　王妃様がなさったのでは、皆も従わないわけにはいきません。(拍手をする)顔から火が出そう。
ミラボー　しかし、あの滑るように歩き、百合とバラの花を一緒にしたような王妃様が、にこやかに立ち上がり拍手をする様は、見物でしたでしょうな。
ランバル　わたしの苦労も知らず。
ミラボー　まあ、お子様がお生まれになったお祝いのオペラですから、お喜びが過ぎたのでしょう。長い間フランス中が待ち望んでいた子どもだ。お世継ぎというわけには参りませんでしたが、子どもが産まれないというわけではないことがわかったのであれば、
ランバル　無礼な。あなたのような貴族が口にすべきことではありません。
ミラボー　これは失礼、だが、町の娘でも知っているお話。王様と王妃様の関係は。
ランバル　・・・。噂でございましょう。
ミラボー　そういうことにしておきましょう。なに不自由のない王宮でのお暮らし、だが、お可哀想なところもある。
ランバル　ええ。たしかに。フランスに嫁がれたのはまだ１４歳の時。お若い二人は、夫婦の何たるかがおわかりにならなかったのです。
ミラボー　お寂しくあられた。
ランバル　オペラ見物や舞踏会はまだしも賭けトランプに、ご自分のお金がなくなるまで買われる新しい洋服、新しい髪型、それから贅を尽くした豪華な食事、それからお菓子も。自分の本当の姿がお見えにならなくなっているのです。
ミラボー　ほう、では王妃様は実は浪費家ではない？
ランバル　ええ、そうですとも。
ミラボー　となるとやはり一度お会いしなければならない。
ランバル　なんですの。
ミラボー　いやあ、こちらの話でございます。
ランバル　ここもそうです。
ミラボー　農場で働く娘まで雇って、村そのものを作られた。プチトリアノーン。離宮。ヴェルサイユから離れたもう一つの王宮。いつかは出て行かね

ばなりませんでしょうに。
ランバル　愛のなさがあの方の浪費を止められぬ原因・・(あ、と口を閉じる)
ミラボー　こういう話は甘味が欲しくなる。

ミラボー、さらに砂糖を入れてお茶を飲む。

ランバル　まあ。三杯も。
ミラボー　計十杯です。(飲んで)おお、甘さよ、砂糖よ、どうしてお前は甘いのか、砂糖なの?」

アトリエから、王様のパティシエ、マシャロ、そしてカレーム登場。マシャロはデッサン帳をもっている。

マシャロ　ああ、いかん、いかん、いかん。どうしてもできない。
ミラボー　これは、王の菓子職人、パティシエ、マシャロ殿。
カレーム　師匠は、もう頭が熱くなりっぱなしのようです。いちおう、お伝えすることはしましたけど。
マシャロ　まあ、その件であれば、もうすんだようだ。
カレーム　え。
ランバル　パティシエ、マシャロ。
マシャロ　これは、ランバル様。このようなところまで・・・、まさか、祝賀会の菓子のことでございますか。

カレーム、ランバルに紅茶を入れる。

ランバル　そうではありませぬ。ありませぬが、王妃様も大変楽しみにしていらっしゃるようです。皆様も。だが・・・
マシャロ　はい。誠心誠意つとめております。
ミラボー　今度の細工菓子は、どのようなものかな。
マシャロ　・・・。どなたさまで。
カレーム　ミラボー様です。
マシャロ　ああ、貴族の位を金で買われた・・・
ランバル　師匠。(ミラボーとランバルに)すごいのが出来そうなんです。師匠は、ヴェルサイユ宮殿をお造りになるつもりなんです。
カレーム　なんと。
マシャロ　まあ。
ミラボー　王妃様のご長女様がご生誕された日の、にぎわいや掲げられた旗、演奏する楽団。素晴らしいですよ。
ランバル　もう絵はできています。大きなテーブル四つをつなぎ合わせたものの上に置くのです。

二人、スケッチブックを見る。

ミラボー　このような精密精巧なものが砂糖でできるというのか。

カレーム　砂糖だからできるんです。砂糖は甘いだけじゃなくて、どんなものともよくあいますし、膨らんだり、固まったり、ネバネバしたり、溶けたり、自由だ。しかも食べられます。

マシャロ　わたしは、これを光り輝くようにしたい。

ミラボー　光り輝く？

ランバル　宮殿が。時節柄あまり華美なものは、またご評判が・・・

マシャロ　それは王妃様がお子様の誕生をお喜びになったお心そのものなのです。だが、上手くいかない、にごってしまう。いかん、いかんいかん。あの方に、かつての笑顔を。アーモンドの色が混じったり、果物の色が出てはいかん。どうしたものか。

カレーム　・・・砂糖を使えばいいんだ。

ランバル　お菓子はお砂糖を使って作るものでしょう。

カレーム　はい。砂糖を上からかけるんです。

ミラボー　上からかけても、さらさらとこぼれ落ちてしまう。それに砂糖は白い。

カレーム　砂糖の衣をつくればいい。透明に光る。

マシャロ　砂糖の衣。

カレーム　砂糖に熱を加えたらどうでしょう。

マシャロ　それはやってみた、砂糖は熱を加えると茶色くなる。

カレーム　あまり煮立てないで。ちょうどいい温度があるはずです、それから水の量も。うまく固まるだろうか・・・。形がこわれてしまっては元も子もない。そうだ。ワインの澱を使えばうまくいくかもしれない。

マシャロ　おまえが、焼きメレンゲを固める時に使えるといっていたものか。

カレーム　ええ、そうです。

マシャロ　よしやってみよう。オーブンの火を入れろ。

ミラボー　もう入ってます。

ランバル　うん。砂糖か。カレーム、よく気がついた。砂糖なくては魔法にならぬ。

マシャロ　きっと上質な砂糖の方がうまくいきます。

カレーム　うむ。ランバル様。これでは砂糖が足りません。ヴェルサイユ宮殿を覆うのに、一体どれだけの砂糖が必要か。

マシャロ　それは心配ないでしょう。砂糖は次から次へとこのフランスにやって来ています。海の向こうから。(と望遠鏡で見る)

ミラボー　わかりました。申し伝えましょう。

　　白ければ白いほどよいのです。ああ、これでわたしが心からお出ししたいものが出せる。あの方に喜んで頂ける。

　　さっそくとりかかりましょう。

　　では、失礼致します。

　　二人残される。

ミラボー　菓子職人というのは、なにがあんなに楽しいのでしょうな。

二人、紅茶を飲む。にっこりする。顔があう。我にかえる。

ランバル　ミラボー伯爵。それで御用の向きというのは。

ミラボー　それです、ランバル夫人。お願いがございます。あなたは王妃様に近い立場だ。お渡しして頂きたいものがございます。

ランバル　あなたのような方は、王妃様にお声をかけて頂くことも難しいですよ。

ミラボー　王妃様ではございません。

ランバル　まさか。

ミラボー　王妃様を通し王様に、これを。(と望遠鏡)

ランバル　その薄汚い遠眼鏡を王様に。しかもあなたの目垢がついている。

ミラボー　わたしの目垢を拭き取りますと、出てくるのは、コロンブスの目垢です。

ランバル　なんですって。

ミラボー　この望遠鏡は、今をさること３００年前。大航海に乗り出し、新大陸を発見したクリストファー・コロンブスが、１４９２年１０月１２日、まさに最初の新世界、西インド諸島を発見したおりのものなのです。この望遠鏡の先に、彼が当時インドだと誤解した、カリブの宝石のような島々がきらきらと光っていたわけです。

ランバル　発見したのは水夫ではないのか。

ミラボー　いいえ、違います。コロンブス自身です。そしてその発見こそ、以降今日に至る植民地時代の始まりでした。王様の狩りと錠前いじりのご趣味は有名ですが、それ以上にお好きなものがあるとか。

ランバル　たしかに。

ミラボー　書斎には、数々の錠前と並んで、手塗りの地図、海図、環状天球儀、太陽系儀、などがあるとお聞きします。「航海術」に対する王様の知識とどん欲さは、専門家並みでいらっしゃるとか。お喜びになるのではないでしょうか。コロンブスの望遠鏡。そして、それを王妃様がおわたしになれば、お二人の中も、そして、それを取り次いだあなた様のお目覚えも上がりましょう。

ランバル　・・・わかりました。王妃様にお話ししてみましょう。

オペラの音が聞こえ始める。

ミラボー　また、始まったようですな。

ランバル　いかなくては。

アトリエから大声がする。「素晴らしい、輝いている、砂糖の衣だ」「はい」「カレームよくやった」「ほんとに素晴らしくきれいだ」

ミラボー　砂糖の手配をお忘れなく。

ランバル　はい・・・。

ミラボー

王妃様の御評判が心配ですかな。なに、よいではありませんか、砂糖のヴェルサイユ宮殿くらいは。それで、痛んだお心の慰めになるのであれば。本物のヴェルサイユ宮殿をおおうほどの砂糖が、彼方からやってきているのですから。「おー、砂糖よ砂糖、おまえはどうして甘いのか？」

ミラボー、望遠鏡で遠くを見つめる。
やがて、カリブが流れ込んできた。

3

カリブの島。フランスの植民地。森。奴隷たちが休息日の前夜、集まっている。彼らの祖先の歴史を忘れぬためと白人への抵抗のために。１７５４年頃。
どこかアフリカを思わせるリズム。太鼓や木、手がたたかれる。例の砂糖の箱がある。それは神への捧げものであるらしい。そして一人の男が立ちあがった。ジェロームが箱から砂糖の入った小袋を取り出した。

ジェローム

今日は、砂糖みたいな日だから、このジェロームが話をしよう。

皆、歓声。ジェローム「シュクシュクシュクシュクシュク・・・」と泳ぐ真似。皆も唱和する。

ジェローム

俺たちの先祖の話
大きな 船に 乗せられていたはずの先祖は
なぜか泳いでいた 海 大海原 知らない海

三角頭のサメが追いかけて来た 大きな ロ ワーオ ワーオ
先祖は泳いだ 急いで 急いで 急いで

追いかけて来る 大口開いて サメが「食っちゃうぞ」
逃げろ 逃げろ逃げろ

大きな口がせまる

もうだめだ だけど 死んだら会える 昔 死んだ父さんやおばさん 朝
飯の途中で引き離された娘
会える 会える 会える

だけれども 俺を船に乗せた そして船から海に突き落としたあいつらに サメに食われる痛さを知らせなきゃ

精霊レグバよ レグバよ 道をお開きください

願いはかなえられた 裸のはずの先祖の腰に刀が現れた

サメは来る 大口

俺を食え そしてそのまま連れて行け。

サメに、ジェローム食われる芝居。サメ泳ぎだす。「ワオワオ」「ソーソー　ヤイヤ　ラレフォー」のかけ声が響く。

先祖はサメに食われたまま 島に来たこの島に来た

そして、白人たちの前で 刀でサメの腹をやぶき「痛かった」といったんだ

それが 俺の ジェロームの先祖 俺たちの先祖

皆がサメに食われた痛みを繰り返し、白い服の女、マボが現れる。箱の中の砂糖を口に含み、そして踊る。やがて、皆も巫女である彼女を中心に踊る。そして精霊への祈りを捧げる。ジェロームの話の途中から現れた、アフリカから連れて来られたばかりの巨人、マカンダルもその輪に加わった。やがて、巫女の神への祈り大きく。ジェロームが箱から取り出した砂糖を捧げ、精霊へ呼びかけようとしたそのとき、

ジェローム　来るぞ。(じっと闇に目を凝らして)俺たちじゃない誰かが。白人監督のバーデルだ。

エメー　マボをかくして。

マルゴ　せっかくの砂糖がなくなったみたいだ。

白い女が連れて行かれる。砂糖の箱も一緒に。ジェロームが持っていた砂糖の小袋は、素早くエメーが懐に隠した。

アイダ　(マカンダルに)あんたなにやってるの。座ってな。

白人の監督バーデル来る。鞭を持っている。望遠鏡でのぞきこんだ。奴隷頭のテレマックもいる。

バーデル　テレマック。

テレマック　はい。
バーデル　こいつらは何をしていたんだ？
テレマック　さあ・・・
バーデル　テレマック。おまえを奴隷頭に任命したのは誰だ？
テレマック　バーデル様です。
バーデル　また腹を空かせたいのか。
テレマック　いえ。それはいやです。
バーデル　おまえと同じ仲間じゃないか、わかるだろう？
テレマック　ジェロームは語り部だから祖先の話をしていたんだと思います。
バーデル　祖先の話。
ジェローム　休息日の前の日、俺たちが集まって、歌い踊ることは許されているはずだ。
バーデル　おまえたちは、そのおかしな歌と拍子がなければ、植え付けも収穫ものろまで役に立たない。

望遠鏡で眺める。

バーデル　ほう、見える見える、間抜け面が。
アイダ　ねえ、バーデルさん。
バーデル　アイダ。
アイダ　のろまで役に立たないあたしたちだけど、許してくださいな。
バーデル　そうだな。なんせ古い望遠鏡だ。間抜け面に見えるのは間違いかもしれねえ。俺たちの神は気前がよくていらっしゃる。そう思わないか。
アイダ　え。
バーデル　おまえたちにも休息日をもうけていらっしゃる。日曜日の労働はなしだ。なあ。おまえたちの神様はどうなんだ？
アイダ　・・・、ねえ、なんのこと・・・

バーデル、アイダを殴る。

バーデル　アイダ！
エメー　いいか、集会は禁止だ。

マカンダルとバーデル目が合う。森が揺らいだ。バーデル感じた。

バーデル　・・・この森の奥に行くのもな。ジェローム、おまえか、首謀者は。
ジェローム　違う。

バーデル、鞭を使おうとする。

エメー　やめて。
ジェローム　おまえは下がっていろ。
エメー　（前に進み出て）ジェロームしか、新しい垂直ローラー式絞り機は動か

バーデル　せない。だから・・・、怪我をしたら、おまえたちが困る。
エメー　エメー。ありがとよ。教えてくれて。いいだろう、今日のところは。が、こいつは、今日のところはってわけにはいかねえ。
バーデル　テレマック。盗んだのは誰だ。
テレマック　・・マルゴ。マルゴと母親の小屋にありました。

マルゴ、思わず立ち上がる。

ジェローム　マルゴがなにをした。
バーデル　何をした？（マルゴに）何をした？
マルゴ　頼む。許してくれ。俺は食べさせたかっただけだ。
バーデル　テレマック。
テレマック　はい。
バーデル　おまえのおかげだ。おまえの通報で泥棒がつかまった。

皆、テレマックを見る。

アイダ　あんた、まさか病気のお母さんに・・・
バーデル　盗んだ。こいつ。サトウキビを。
マルゴ　ほんのちょっと、根本のほんのちょっとを齧らせただけだよ。
バーデル　いいか、サトウキビからは何が出来る？
マルゴ　え？
バーデル　何ができる？
ジェローム　さ、砂糖。
エメー　そうだ。俺たちが、この島にサトウキビを持って来た。そして工場を作り砂糖ができるようになった。もう１５０年も前だ。俺たちのものだ。
バーデル　違う。砂糖は精霊への捧げもの、そして、俺たちへの、
マルゴ　ジェローム。
バーデル　（マルゴに）お前が盗んだのは、金だ。

バーデル、マルゴを殴る。立たせて、ささやく。

ジェローム　世の中にはな、いいことと悪いことがある。この島にもだ。わかるか。
バーデル　は、はい。
マルゴ　いいことは、この島でサトウキビがとれることだ。ヨーロッパじゃとれねえ。
バーデル　は、はい・・・
ジェローム　じゃ悪いことはなにか。おれがこのくそ熱い湿った島にいなきゃならねえことだ。おまえらの監督をするためにな。
食い物が足りないんだ。だから、マルゴの母親の病気も治らない。決まりがあるはずだ。マルゴの家にもっと食いものをやれ・・・砂糖も。

バーデル　砂糖を?（笑い。マルゴに）砂糖泥棒はどうなるか知っているな。ブルボン王家の家紋、白い百合の焼き印。一回目は右肩だ。真っ赤に焼けた鉄を・・・

バーデル、右手をマルゴの肩に、押し付けるとマルゴ、恐怖のあまり絶叫する。

バーデル　本物の焼き印は、明日だ。それで、その後は働け。今は収穫期だ。ぐずぐずはできねえ。マルゴ、おまえはサトウキビのジュースを煮詰める大釜の前で働かせてやろう。一日中休まずかき混ぜろ。昼も夜も座るな。火を絶やすな。砂糖を作るんだ。

エメー　死んじまうよ。

ジェローム　焼き印の後、一日は休ませてやってくれ。

バーデル　テレマック。

テレマック　は、はい。

バーデル　こいつを連れて行け。アイダ、おまえに話がある。来い。

バーデル行く。テレマック、マルゴを連れて行く。アイダ行く。マカンダルが突然倒れた。

ジェローム　大丈夫か・・・かなり悪い。

エメー　この人、もしかして・・・

ジェローム　なんだ。

マカンダルがうめいた。

エメー　ジェローム、何か食べさせなきゃ。

エメー、小さな袋から砂糖を取り出す。

ジェローム　エメー、それは。

エメー　こういうときのためのもんじゃないか。

エメー、砂糖をマカンダルに食べさせる。

マカンダル　甘い・・・

と再び横たわったマカンダル。エメー、砂糖の小袋をジェロームに返す。涼子が望遠鏡で見ていた。

4

現代、マンションの一室。深夜。涼子、望遠鏡を持っている。何かを探している。砂糖の箱を開ける。中を見る。いや、違うのか、何か探している。宇山登場。なにか別室で本を読んでいたらしい。古く厚い本を持っている。

宇山　どうした涼子。
涼子　どこにあるの・・・
宇山　・・・
涼子　どこだろう。
宇山　さ、もう寝よう。
涼子　探しているのに。
宇山　うん。
涼子　望遠鏡は？　望遠鏡はどこ？
宇山　手に持っている。
涼子　ほんとう？
宇山　ああ。

涼子、望遠鏡を見た。

涼子　ねえ、明日も一緒にいてくれる？　それで一緒に・・・
宇山　ああ、一緒に食べよう。
涼子　・・・ねえ、あなたはよかった？
宇山　なにが。
涼子　パティシエになったこと？
宇山　パティシエになったことを後悔している職人はいないよ。
涼子　・・・。

5

涼子、望遠鏡を机に置いた。宇山、涼子を抱きかかえるようにして別室へ。持ってきていた本をめくるが、砂糖の箱に目をやる。近づいてなめようとするがやめる。宇山は机の上の望遠鏡には特に気を止めなかった。

6

サトウキビを持ったジェロームが辺りをうかがいながら通り過ぎる。

カリブの島。森の奥。倒れているマカンダルをマボが見ている。マカンダル目を覚まし、目が合う二人。と思いきやマボは森の奥へ走り去る。サトウキビを持ったジェローム登場。

ジェローム　起きたのか。
マカンダル　おまえは・・・
ジェローム　ジェロームだ。言葉、わかるか。わかるか？
マカンダル　・・わかる。わからなかったはずなのに。
ジェローム　俺の先祖、同じ大陸、来たんだな。
マカンダル　大陸・・・
ジェローム　白人の言葉。大きな島だ。俺は知らないが、この島よりずっと大きいらしい。俺、この島で産まれた。少し大きな昔、１５０年前だと奴らはいう。連れて来られた先祖の言葉、少しわかる。白人の言葉、混じっているが。名前。
マカンダル　マカンダル。
マカンダル　マカンダル、これを食え。
ジェローム　見たことがない木だ。
マカンダル　そうか、見たことがないのか。サトウキビだ。
ジェローム　・・・
マカンダル　心配するな。白人、ここまで、やって来ない。森の精霊、怖れている。
ジェローム　精霊。
マカンダル　森の奥にいる。さあ、食え。

マカンダル、慎重に見ている．匂いをかいでいる、動物のように。

ジェローム　大丈夫だ。食べられる。
マカンダル　最初に食べるもの。よく見て、匂いをかぐ。

マカンダル、意を決し、かじろうとする。

ジェローム　待て。皮を剥く。

ジェローム、器用に皮を剥く。

ジェローム　かじれ。それで中から出て来るジュース。吸う。

マカンダル、ジュースを吸う。驚きと幸せが広がる。マカンダル、夢中で吸う。

マカンダル　甘い。
ジェローム　そう。果物や蜂蜜より甘い。
マカンダル　これのほうが甘い。
ジェローム　白い砂糖はもっと甘い。

マカンダル　本当か。
ジェローム　ああ。なんだおまえ、覚えてないか。

マカンダル、あの感触を思いだす。

マカンダル　ああ・・・
ジェローム　だが、俺たちの口には入らない。
マカンダル　おまえたちが作っている。
ジェローム　それが「奴隷」だ。
マカンダル　逃げればいい。
ジェローム　泳いでか。この辺りの島、どこも白人の持ち物。
マカンダル　大陸、かえればいい。

エメー現れる。水の入った瓶を持っている。

エメー　水を汲んできたよ。
ジェローム　エメー。

エメー、マカンダルに水を渡し、マカンダル飲む。

エメー　あんたは蒸気の船で「大西洋」って広い海を渡って、二ヶ月かけてここにきたんだ。わたしたちに船は動かせない。見張りも厳重だ。
マカンダル　水もなかった。二人一組で足には鎖、狭い船底で何人も死んだ。それどころか、仲間があいつらの楽しみで海に投げ込まれた。
エメー　わたしたちの先祖もそうだったんだろうね。
ジェローム　(気づいて)砂糖、のせいなのか。俺が、自分の娘や母親と別れ別れになったのは。
マカンダル　この島、サトウキビだけの島。前に住んでいた人、白人持ち込んだ病気、死んだ。残ったもの殺された。そして、俺たち、連れて来られた。
エメー　砂糖のために。
ジェローム　おまえたちは、それ、いいのか。おかしい。
マカンダル　なにが。
ジェローム　甘い、いい。俺の国、俺の家族、みな甘いものが好きだった。腹が減れば果物をとった。蜂に刺されても蜂蜜をとった。よいことがあると太陽に乾かしとっておいた蜂蜜を。誰かが死ぬとあちらで楽しく過ごせるように果物を干したものを。砂糖、違うのか。悪いものなのか。・・・それは、わたしたちにはわからない。(ジェロームに)ほんとうにこんなにたくさんの砂糖、どうしているんだろう。ほんの少しでいいのに。毎日お祭りなのかしら。毎日が精霊を呼ぶ祭礼なのかしら。そんなこと考えたこともねえ。(マカンダルに)よいはず、ない。昨日、おまえ、マカンダル。見た。
マカンダル　なにをだ。
ジェローム　森の儀式。

マカンダル　…
エメー　ねえ。この島でだって、砂糖は悪くないよ。わたしたち、白人にわからない言葉で、嬉しいときいうもの。砂糖みたいだ。
ジェローム　怒るときこういう。砂糖がなくなったほうがましだ。
エメー　心や体がおかしいとき、砂糖を縛られたみたいだ。
マカンダル　わかる。それ、わかる。
ジェローム　砂糖は薬になる。元気になる。

ジェローム、エメー、辺りをうかがう。エメー、懐から袋を取り出す。中からは真っ白な砂糖。

エメー　なめてみて。
マカンダル　(なめて)ああ。舌…溶けた…広がった…頭…甘い。
ジェローム　砂糖だ。
マカンダル　砂糖。
ジェローム　おれたち、森の精霊に捧げる。そして、精霊の力、俺たちに分け与えられる。俺たちの仲間が、これ、口に入れる。そのとき…
マカンダル　そのとき…。

森が揺らいだ。

ジェローム　俺たちは、待っている。
マカンダル　何をだ。
エメー　大陸からやって来てサメの腹を剣で引き裂いた私たちの祖先は、その後、森で精霊にあった。そして、
マカンダル　精霊？
エメー　ええ。
マカンダル　白い精霊か。
エメー　どうして。
マカンダル　俺会った。眼を覚ましたとき、ここで。それで森の奥へ行った。
エメー　それはマボだ。ジェローム、やっぱりそうだよ。マボは確かめにきたんだ。
マカンダル　何の話だ。
ジェローム　俺たちの先祖は大きな男だったという。どの白人よりも。俺たちは、その先祖の魂が再びやってくるのを待っていた。

エメー、砂糖の小袋をマカンダルに渡した。マカンダル、しばらく二人を見ていたが、砂糖を二人に分ける。

マカンダル　一緒に食べる。仲間だ。

三人、口に含んだ。行く。

7

「こっちよ」の声。さらに森の奥。「こっち」アイダ出て来る。
「おい、待ってくれ、あまり奥に行くなよ」バーデルがやって来た。

アイダ　こっちよ。
バーデル　もう、勘弁してくれ、へとへとだ・・・
アイダ　どうして、わたしをぶったの。
バーデル　ええ？
アイダ　どうしてぶったか言ったら勘弁してあげる。
バーデル　仕方がなかったんだ。痛くはなかっただろう。
アイダ　痛かったわ。
バーデル　おお、ごめんよ。俺の可愛いチョコレートちゃん。おお、可愛い、可愛い・・・

バーデル、アイダを抱きしめる。森の気配。バーデル少し恐ろしくなり、

バーデル　どうして、こんな森の奥へ。
アイダ　そのほうが、ゆっくりできると思ったから。人目につかないで。
バーデル　おお。だが、出るんだろ。
アイダ　出る？
バーデル　魔女が。おまえたちの「言い伝え」か、それに出て来る。
アイダ　出るわ、魔女が。
バーデル　おい。
アイダ　その魔女は真っ黒な服をきているの。
バーデル　おいおい。
アイダ　そして、出逢った男に「わたしを愛している？」と聞くのよ。
バーデル　・・・
アイダ　男はその魔女があまりに美しいのでこういうの。「ああ、愛してるさ」
バーデル　すると魔女はその黒い服を脱ぎ捨て・・・
アイダ　脱ぎ捨て・・・
バーデル　化け物になっていうのよ。「さ、キスしておくれ、このわたしに」

アイダ、キスを待つ。バーデル恐怖に縛られるが、

バーデル　あ、あ、あ、冗談だな、冗談。俺の可愛いチョコレートちゃん、じゃあキスしてあげよう。

キスしようとしたときにバーデルを止め、しかし、背中を向けてまさぐられながら、

アイダ　待って。
バーデル　なんだい。さあ、早く。
アイダ　待ってたら。ねえ、
バーデル　そうだ、砂糖菓子を持って来た。食べるだろう。
アイダ　ええ。

バーデル、アイダの口に砂糖菓子を含ませる。

バーデル　甘いか。
アイダ　甘いわ。
バーデル　そうだろう。
アイダ　ねえ、そろそろいいんじゃないの。
バーデル　なにが。
アイダ　白人の男とわたしたちが結婚すれば、その女は奴隷じゃなくなるわ。
バーデル　そうだ、そういう決まりだ。
アイダ　じゃあ、ね。もう長いことになるんだから。
バーデル　なんの話だ。
アイダ　もう、いやな人。わたしたちの結婚。
バーデル　(にやにやとしながら)結婚、それは・・・
アイダ　なに・・・、それはって？

バーデル泣き出す。

アイダ　泣いているの。
バーデル　アイダ、お前は幸せだ。
アイダ　どうして？
バーデル　砂糖菓子を食べている。甘いか。
アイダ　・・ええ、甘いわ。
バーデル　そうだろ。そうだろ。俺の娘は砂糖菓子を食べられない。
アイダ　娘？
バーデル　ああ、そうだ。本国にいる俺の娘だ。ほら、見てごらん。(とロケットの写真を見せる)やせっぽちだ。太れないんだ。食いもんが悪くて。俺の商売がうまくいかなくて、こんなところで稼がなきゃいけなくなった。ねえ、娘さんて・・・
アイダ　なあ。本国でも砂糖菓子なんて食べられるのは、貴族だけさ。俺みたいな貧乏人のうちの娘は・・・可哀想だ。なあ、そうだろ、アイダ。
バーデル　・・・そうね。
アイダ　おまえには、おれがこうやって、あまーいのをめぐんでやる。おまえは幸せだ。娘が可哀想だ。な。
バーデル　そうね。可哀想だわ。

バーデル　ほら見ろよ。やっぱり痩せてる。栄養が足りねえんだ。
アイダ　送ってあげればいいじゃない。娘さんに。お砂糖。
バーデル　できるならとっくにそうしてる。だが、砂糖は許可がなきゃ送れねえ。ほんの少しでもな。さあ、俺の可愛いチョコレートちゃん・・・なあ、甘いか・・・
アイダ　・・・甘いわ。

アイダをまさぐるバーデル。遠くから奴隷たちの太鼓の音と祈りが響いて来る。

8

マンションの一室。宇山、吉本、宇山の店のオーナーがいる。オーナー、砂糖の箱のふたを開けて、中を見ている。そして、なめる。

オーナー　甘い・・・。

が、蓋をぴしゃりとしめた。

吉本　オーナー。そりゃそうですよ。砂糖、しょっぱかったら・・・塩じゃないですか、ねえ宇山さん。
宇山　・・・
吉本　え？
オーナー　吉本君。
吉本　はい。
オーナー　(吉本を無視して宇山に)宇山さん。わたしはあなたに任せてきた。あなたは自分で作りたいお菓子を作り売ってきた。雑誌にも載った。テレビの取材も受けた。
宇山　オーナーのおかげだと思っています。
オーナー　よい機会だと思ったのです。わざわざご自宅までおしかけたのは、あなたが最近なかなかつかまらないという事情や外での食事を好まれない事情もありますが、いや菓子屋が忙しいことはわかっています、ただ、この時点で話しておきたかった。考え方、というか。思想です。
吉本　売上、落ちてますからね。
宇山　・・・
オーナー　わたしが考えているのは、短いスパンの話ではありません。もっと長期的なものを見据えたビジネスの話です。
宇山　そういうことは、お任せしていますから。

オーナー　職人が職人であるための拒絶反応をわたしは知っています。あなたは新しいオリジナルな商品を作り出し続けることと、それを毎日同じ質でお客様に提供することのバランスがとれた人だ。そこをわたしは買った。だから、これは提案です。そして、明日から店に何を並べるかという話でもない。宇山さん、スイーツとはなんですか？

宇山　え。

オーナー　吉本君。

吉本　甘い？

オーナー　・・・そうだな。

吉本　ピンポーン。

オーナー　しかし、今後プロデュース側にまわろうという人間にしては、正直、不足なものが多すぎる答えだな。

宇山　え。あ、宇山さん。俺、まだちゃんと話していなかったですけど、店はもうちょっと続けますが、こっち側の勉強もしていくんで。一応、所属はオーナーの別会社に。

オーナー　そうか・・・。

吉本　そのお話は、またきちんとした形でしようと思っていたのですが。

宇山　あ、今、話しましたから。はい。で、甘い？ ですよね。

オーナー　甘い、か・・・

宇山　そうです。そこに鍵があるのではないか、そうわたしは考えました。

オーナー　自動販売機に甘くない飲み物が入るようになった時のことを覚えていますか。

宇山　ええ。

オーナー　どう思いました？

吉本　だれが買うんだろうって思いましたよ。

オーナー　そう、わたしも思いました。お茶や水をだれがお金を出して買うのか。そんなに昔の話じゃない。たかだか２０年前です。だが、現在の状況はご存知の通りです。

宇山　でも、別に砂糖が悪いわけじゃありませんよ。

オーナー　さすがだ。

吉本　ああ、ヘルシーブームとか、そういうことですか。ノンカロリーとか。

オーナー　そう。変わったのはわたしたちだ。だが、お菓子全体の売れ行きが落ちているわけじゃない。砂糖の消費量も年々あがっています。なぜだろう。

吉本　なぜでしょう？

オーナー　われわれは豊かだ。不況だとかいうが、誰も飢えて死ぬものなどいない。それどころか、今、日本人の食卓は、人類史上、どの時代、どの民族にもまして豊かだといわれています。

吉本　そうなんすか。

オーナー　スイーツも、お菓子もそうだ。２４時間、３６５日、お金さえあれば手に入る。デパートの名店街もケーキバイキングもこの国にしかな

い。

吉本　はあー。でも、それってすごいことじゃないんですか、ねえ。

オーナー　そうです。人類が、長い間、求めていた世界の実現。素晴らしい、とわたしも思う。第二次世界大戦のおり、砂糖が配給制だったなど想像もできない。人は長い間飢えないために食べていたのに、今、われわれは楽しみのために食べることができる。

宇山　そうですね。で、オーナー。

オーナー　もう少し話を聞いて下さい。たしかに時代の反動はある。失礼。あなたのような方もいる。パティシエという職業がら食を制限されるのは辛いでしょう。

宇山　・・・いえ。

オーナー　しかし、生活習慣の変化は人間そのものの変化をもたらすのは当たり前です。味覚障害のかたも増えているようだ。人のDNAに飽食の時代への対応は刻まれていませんから。吉本君。

吉本　はい。

オーナー　ネズミはノンカロリーのものを食べません。

吉本　ネズミですか。

オーナー　砂糖とノンカロリーの人口甘味料の二つを置いておくと、学習して、ノンカロリーのものは口にしなくなるのです。

宇山　へえ。ヘルシーブーム、関係ないですもんね、ネズミ。

吉本　そう・・・。しかし、それにも関わらず人は・・・。ねえ、宇山さん。お菓子ってなくてもいいじゃないですか。

宇山　オーナー、それはいくらなんでも、ちょっと・・・

オーナー　そのとおりです。菓子なんかなくてもいい。パンがなければお菓子を食べればいいじゃない、と言った人がいましたが、それはつまり、通常であれば、食べなくても困らないということだ。だが、人は甘味を求める。なぜですか。

宇山　・・・なにか、あるんでしょう。

吉本　なにか？

宇山　・・・。

オーナー　わたしはそこに可能性を感じます。甘味を求める、人の抗いがたい欲求に。その欲求が強いからこそ、人は、必死に例えば砂糖をだめだだめだと悪者にしようとする。ええ、それが、このビジネスの可能性です。

吉本　・・・なにか可能性がありますか？

宇山　宇山さん。わたしと一緒に食の革命を起こしませんか。

オーナー　革命？

吉本　砂糖が貴重品だった時代から、カロリーを摂取する一番簡単な方法になった時代、そして、今、砂糖は楽しみのためにあります。それぞれ食の革命でした。わたしは、もう一つ、これをひっくり返してみたい。

吉本　どうするんですか。

オーナー　朝食です。
吉本　朝食って、朝飯ですか。
オーナー　実際、そうした兆候はあります。食事代わりに菓子パンを食べるのは当たり前になった。
吉本　それって何か変なんですか？
オーナー　黙っていてくれませんか。
吉本　俺ですか。
オーナー　宇山さん。朝食に食べるスイーツです。作りましょう。一緒に。
宇山　朝食に食べるスイーツですか。
オーナー　ピンときませんか。
吉本　はい。
オーナー　たしかに、そうした食品はすでに存在するし、朝食にお菓子を食べる人もいる。だが、わたしは、それをライフスタイルとして提案したい。ヨーロッパの王宮では、朝食にたくさんの甘いものが出たそうです。今の日本の食の事情は、まさに王宮です
吉本　ああ、ホテルとかで食べる豪華な朝食メニューをスイーツで・・・
オーナー　違う。ターゲットは普通の人たちの毎日の朝食です。コンセプトははっきりしている。時間がない現代人のために、簡単、便利。そして安い。しかし見た目は綺麗で豪華だ。
吉本　でも、ヘルシー志向ですから、時代は。
オーナー　そうだ、大きさの問題があるだろう・・・、それから、タンパク質の割合が問題だ・・・豆やチーズをうまくつかえばいい。だが、それはあくまでスイーツでなくてはいけないんです。砂糖を使えば出来る。出来ますよね。
吉本　オーナー、砂糖にこだわりますね。
オーナー　甘くなくちゃあダメだ。
吉本　え。
オーナー　砂糖を使って甘くなけりゃ。失礼。ねえ、これはチャンスですよ。朝食に食べるスイーツ、日本中で・・・
宇山　お話はわかりましたが・・・、わたしは職人ですから。作るだけです。そういうのは企業とかがやること・・・
吉本　もちろんそうした方面でも動いていますよ。だが、わたしはあなたにやってほしいのです。かつて、一人の職人が開発したお菓子が、今では世界中で食べられるようになったことはいくらでもあります。そう、これが世界にひろがるかもしれない。
オーナー　でも、そういうのって子供の頃から食べてるもんじゃないと無理じゃないですか。
吉本　え。
オーナー　おふくろの味って言うじゃないですか。
吉本　・・・もちろん、商品にバリエーションは持たせるつもりだが。
オーナー　俺は、朝パン、ダメなんですよ。むいてない感じでしょ、パティシエ。う

ちはご飯に味噌汁に納豆だったから。
オーナー　だがお菓子はどうだろう。
吉本　どうなんすか？
オーナー　甘いものが嫌いな人はいない。いや好き嫌いや習慣ではないんだ。なにか、こう奥底に根ざしている・・・。お菓子はそうだ。そうなんだ、違うんだ。
吉本　でも、それって「甘い」ってことを、みんな知ってるからじゃ ないですか。
オーナー　・・・吉本君。君は馬鹿なのか頭がいいのか、わからないな。
吉本　どういうことですか？
オーナー　わたしたちは、結局、情報を食べています。今の時代、わたしたちは短時間に、大量に、もっと広く、情報を伝えることが出来る。皆が知っている甘さに、違う価値を付け加えてやればいいんです。売れます。
（吉本に）あなたのいう刷り込みはあるでしょう。だが、人は後天的にも味を学習するんですよ。

と、奥の部屋から涼子が現れる。皆を見ず、砂糖の箱へ向かう。砂糖を手に取る。

オーナー　涼子さんでしたね。お邪魔をしています。
吉本　（宇山に見られ）ちょっと、話ししときました。
涼子　ほんとうにそれ甘いのかしら・・・
オーナー　え。
宇山　・・・。
オーナー　極端な話。美味しくなくても構わない。
吉本　オーナー、そういう話でしたら、
オーナー　いや。もちろん、美味しいと感じるものがいいに決まっている。それはあなたの仕事です。ねえ、宇山さん。
宇山　はい。
オーナー　わたしは家族と食事はしません。
吉本　え？
オーナー　人に気をつかうくらいなら、一人が気楽だ。いつでもどこでも勝手に一人で食べられる、そういうときにスイーツ、はまるでしょう。
涼子　ほんとうに甘いのかしら・・・
オーナー・宇山　・・・。
吉本　タルトとかですかねえ。
オーナー　タルト。タルトいいじゃないか。
吉本　ほら、結構どうとでも作れますから・・・
オーナー　ああ。そうだな。宇山さん、考えていただけますね。なに、最初に言ったが、明日からというわけじゃありません。

涼子、砂糖を手に取っている。

オーナー　砂糖は、今も昔もビジネスです。
吉本　オーナー、そろそろ。
オーナー　では、失礼します。

帰りかけるが。

オーナー　ねえ、宇山さん。売れるお菓子を作りましょう。もっと。
宇山　・・・三百の生菓子と千個の焼き菓子を毎日作ってます。それは大変だが楽しいし嬉しいことです。だけど、俺は「この一個」を作りたいんです。今は。
オーナー　じゃあ、なぜあなたは菓子職人なのか。多くの人に食べてもらえるものを作ることこそが命でしょう。
宇山　・・・もう、遅いんで。
オーナー　また、来ますよ。パテシィエ。わたしはあなたにやってほしいんだがなあ。

オーナー行く。

宇山　(涼子に)遅くなったな、今、用意するよ。
吉本　ああ。「深夜のティーパーティ」ですか。
宇山　・・・
吉本　オーナーにも作ってあげたらどうですか。しっかし、変わってるよなあ。
宇山　あれ？ ビジネスマンてああなんすかねえ。
吉本　さあ。
宇山　じゃ無理かなあ、やっぱりこっちも。俺、パティシエ向いてないですよね。
吉本　おまえはパティシエじゃないだろ。見習いだ。・・・もったいない。
宇山　魔法使いになり損なってですか。(卓上の本をながめながら)でも、俺、勉強しないしなあ。ねえ、いつも思ってたんですが、読めるんですか、フランス語。
吉本　菓子職人だからな。
宇山　本場ってことですか。
吉本　いつまでいるんだ。
宇山　あれ、いやだなあ。お邪魔ですか。帰りますよ。
吉本　そうか、じゃあ帰れ。
宇山　ねえ、もう一年ですか。一緒に暮らしはじめて。
吉本　帰れ。
宇山　はーい。ねえ、オーナーの話、聞いたほうがいいと思いますよ。店があって、自分が作りたいものを作れてこそのパティシエじゃないですか。
吉本　店がなければ、下働き、見習いと一緒ですよ。
宇山　・・・。
吉本　じゃあ。涼子さん、また。まあ、人は多分そんなにたくさんのことはで

きないですけどね。
吉本、去る。「今日のお菓子」を除き、すでに用意はできた。
今日は、すごいのが出来そうなんだ。作って来る。もう少し待っていてくれ。
宇山　…うん。
涼子　宇山、別室へ。涼子、望遠鏡で去って行った宇山を、やがて彼方を見る。

9

カリブの島。前回の景からしばらくの時間が経っている。島の総督、ラゼットの部屋。総督が望遠鏡で遠くを見つめている。バーデルが立っている。テレマックもいる。長い間、待たされているようだ。「箱」がある。総督の指の間から砂糖がこぼれ落ちている。一口含んだ。
ラゼット　甘い…。
それから望遠鏡でのぞいた。
バーデル　…ラゼット総督。なにかお見えになりますかね。
ラゼット　(望遠鏡の向きを変え)おまえの間抜け面が見える。
バーデル　ご冗談を。
ラゼット　おまえにこの望遠鏡を持たせているのは、なんのためだ。
バーデル　へっ? そりゃ遠くを見るためで。
ラゼット　望遠鏡は壊れてはいないようだ。
バーデル　そりゃあ大したもんでさ。
ラゼット　となるといかれているのはお前の目ということになるな。バーデル。
バーデル　へ、へい。
ラゼット　わたしの砂糖は。なぜ、収穫が遅れている?(帳簿を見ながら)三日だ。三日の遅れが何本のサトウキビをダメにして、どのくらい、わたしの砂糖をないものにしているかわかるか。
バーデル　そりゃ…
ラゼット　おまえはわたしの金を盗んだ。払うか、バーデル。
バーデル　勘弁してくだせえ。奴隷どもでさ。奴隷どもの数が少なくなっちまって。
ラゼット　なぜだ。なぜ奴らは簡単に死んでしまう?
バーデル　そりゃあ…テレマック…
テレマック　は、はい。…労働が厳しく食糧が足りないのと、気候になれずに死ん

でしまいます。
ラゼット　おまえか。わたしの砂糖のために、よくあいつらを見張ってくれているというのは。
バーデル　ラゼット総督、もう少し食いもんをやって・・・
ラゼット　バーデル。腐ったサトウキビは砂糖にならない。食糧は今のままだ。殺すなとは言わん。だが遅れは許さん。バーデル。
バーデル　は、はい、わかりました。
ラゼット　今日市場で５０人ほど買った。遅れを取り戻せ。
バーデル　はい。あの、
ラゼット　なんだ。
バーデル　わたしは、この島を離れることを真剣に考えております。わたしはこれ以上ここに留まりたくねえんです。わたしは自分のベッドで眠るためにこの島からはなれてえ。娘と妻と同じ屋根の下で、同じ部屋で・・・この不幸な土地に来て以来、心が休まらないんでさ。
ラゼット　かまわんよ。カリブの真珠から離れたいのならそうするがいい。だが、おまえは本国で喰いつめて来たんだろう。わがフランスは何も変わっていない。戻ってもあの国におまえの居場所はない。いいんだな。
バーデル　・・・
ラゼット　少し、ほんの少し、給金を上げてやろう。
バーデル　え。
ラゼット　娘に仕送りする額が増えるじゃないか。ほんの少し。
バーデル　へ、へい。
ラゼット　バーデル。かわりはいる。(テレマックを見て)だれでもいいんだ。わたしの砂糖のために働くのならな。例えば白でも黒でもだ。
テレマック　わ、わかりました。

ラゼット、また望遠鏡で遠くを見る。

ラゼット　見張れ。奴らを。(望遠鏡をわたす)わたしの砂糖を一粒たりともこぼさせるな。その望遠鏡で見張るんだ。
テレマック　あの・・・お話が。
バーデル　テレマック、おまえが何の話を総督にする。
ラゼット　いいだろう。近くに来い。
テレマック　(遠く入口に立っていたが近づき)様子がおかしいんです。なにか起きそうなんです。
ラゼット　バーデル。
バーデル　へ、へい。
ラゼット　見張れ、しっかりとな。
バーデル　はい。
ラゼット　砂糖は、ますます売れる。わたしたちの仲間が、フランスでもイギリスでも、動いている。

バーデル　へえ、なんのことで・・・
ラゼット　今に、皆がもっと砂糖を必要とするようになるだろう。たとえば、朝食に砂糖だ。イギリスではもう始まりかけているぞ。
バーデル　・・・。
ラゼット　砂糖はいい。甘いからな。

ラゼット、部屋を出て行く。

バーデル　テレマック。
テレマック　はい。
バーデル　今日はなんの日だ。
テレマック　休息日です。
バーデル　やつらは森だ。おまえは、奴隷小屋を見張れ。おまえにも銃を貸してやる。なにかあったら、撃て。

バーデル、瓶を取り出しラム酒を飲む。

バーデル　砂糖、砂糖、砂糖、砂糖、酒まで砂糖で出来てやがる。

10

マンションの一室。深夜。酒を飲み今、吉本に連れられて帰って来たばかりの宇山。そして涼子。

涼子　宇山さん・・・。大丈夫。お酒なんか飲んで。
吉本　いちおう止めたんですけどね。今日は、いいからって。
涼子　そうなの。

吉本、宇山を座らせる。

吉本　これおみやげ。・・・っていうか、なに、食べもの。(とケーキらしき箱を渡す)今日は作れないからって、店から。廃棄のだけど。
涼子　・・・
吉本　いや、客に出さないだけで、充分食べられますよ。普段は捨てるんだから。もったいない。世界には飢えてる人もいるんだから、ね。
涼子　宇山さん、最初から飲むつもりだったのかな。
吉本　え、ああ。そういうことかもしれないですね。寝ちゃったかな。

寝ているように見える宇山。

吉本　ねえ。
涼子　なに。
吉本　ほんとに覚えてないの。
涼子　どうして。
吉本　だっておかしいじゃん。そんなドラマみたいな。
涼子　・・・
吉本　記憶がないって・・・、なんで忘れちゃったのかなあ。

涼子、望遠鏡を手にとりのぞく。

吉本　なに。
涼子　見えたのは、赤いのや白いのや黄色いのや緑色、黒いのも・・・そこからわたしは始まっているの。
吉本　・・・なんか、可愛いけど。ねえ、味覚障害ってさ、亜鉛とか飲むとたいてい治るんだよね。
涼子　お医者さんもそう言ってた。
吉本　治らないんだねえ。宇山さんてさ、雇われ店長だけど、こんなところに住んでるんだから、結構もらってるよね。よかったね。
涼子　なに？
吉本　宇山さんにあんまり迷惑かけちゃだめだよ。今、大変なんだから。(机の上の例の本を開いてみて)あーあ、勉強してるんだ。ここに書いてあるお菓子、全部作るつもりなのかね。
涼子　・・・。
吉本　ね、俺より年上？
涼子　わからない。

吉本、涼子のほうに近寄ると、涼子、宇山のほうへ廻り込む。
と、突然

宇山　吉本、帰れよ。
吉本　あ。あれ・・・。大丈夫ですか。ええ、帰りますよ。それじゃ。(涼子に)それじゃあ、また。

吉本、行く。

涼子　お水持って来るね。
宇山　あーあ。飲んじまった。

宇山の物言いに涼子しばらく言葉が出ないが、

涼子　初めて見たよ。お酒飲んだの。
宇山　・・・我慢してたから。

涼子　薬とか、そういうの飲まないで大丈夫なの。
宇山　なあ。なんで、俺はパティシエなんかになって、菓子を作ってるんだ。ケーキとか。
涼子　え？
宇山　俺なあ、好きなんだよ。
涼子　え？
宇山　甘いのだよ。ケーキとかさ。食べたいだろ。食べたくないのか。
涼子　・・・
宇山　おいしいのかまずいのか。俺の作ったものは。涼子。

涼子、ケーキの箱を開ける。

涼子　きっと、きっとおいしいよ。だって、宇山さんが作ったんだもの。ほら。食べたら、少しくらいなら・・・

宇山、立ち上がって、箱の砂糖をなめはじめる。涼子、呆然と見ているが、

涼子　やめなよ、やめなってば。(と抱きしめる)
宇山　甘い・・・、あー、なんで俺は食べられないんだよ。なんで、俺だけ食べられないんだよ。
涼子　わたしが食べる。わたしが食べるから。ね。

涼子、ケーキのクリームを手ですくいなめる。また一口。

宇山　甘いか。
涼子　・・・
宇山　甘いか。
涼子　・・・うん。
宇山　嘘つけ。

宇山、ケーキを叩きつぶす。

宇山　おいしいって言ってくれよ、せめておまえが。

宇山、砂糖を乱暴に皿に盛って机に投げ出す。

宇山　同じなんだろ。食べろよ。食べろって。

涼子、皿の砂糖を指先につけてなめる。

宇山　砂ツブみたいなのか。甘くないのか。
涼子　うん。

やがて宇山もいつもの席に座る。そして、同じ皿の砂糖に手

を伸ばす。砂糖を舐める。

涼子　いいよ。一緒に、二人で食べよう。

これが今日の二人の食事である。

宇山　・・・もう、いい。

涼子　・・・うん。

宇山　怖いんだ。一度食べたら、もう止められないような気がして、俺の身体の甘みを受けとめてくれる臓器は、だんだん弱くなりいつか壊れて、死んじまう・・・

涼子、宇山を後ろから抱きしめる。

涼子　わたしもだよ。ねえ、言ってたじゃない。「甘い」ってことを皆知ってる・・・、私は知らない・・・あなたのお菓子を食べても白黒写真で・・・、おかしいよね、そんな人がいることって・・・死んじゃったほうがいいんじゃないかな・・・

宇山　なあ、俺は、何を作ればいい。

涼子　・・・

宇山　俺は、お菓子しか作れない。どんなお菓子を作ればいい。なあ、涼子。

涼子　・・・

宇山　ありがとう、甘いわ、おいしいね、って。おまえがいってくれるのは、どんなお菓子なんだ。

涼子　・・・

宇山　それが出来なけりゃ、俺は・・・。

涼子　・・・

宇山　俺が作る。俺が作ってやるから。涼子。

宇山、涼子を抱きしめるが・・・。溶暗。

11

ミラボー

「王の菓子職人」のアトリエの前。机と椅子。フランス。ヴェルサイユ宮殿から少し離れたプチトリアノーンの一角。劇場からは、またオペラの音楽が聞こえている。カレーム、いつかのようにメレンゲを泡立てている。前の景から9年がたった1789年。望遠鏡をのぞきながら、ミラボー登場。

おお、そこに見えるのは、最新流行のメレンゲではないか。ムラング

なる場所に住んでいたスイス人のガスパリーニがムラング、ムレング、ムレンゲ、メレンゲ。

カレーム　あなたは・・・、ミラボー様。お久しぶりです。

ミラボー　十年、いや九年ぶりかな。相変わらずここは甘き香りが漂う。砂糖砂糖 それは砂糖 我が言葉を信じよ 信じよわが言葉 おー甘い。

カレーム　ミラボー様、甘き香りは変わりませんが、メレンゲはもう最新流行じゃありませんよ。お噂はよく聞いております。この間開かれた三部会にも代表としてお出になられたそうで。

ミラボー　なぜか貴族のわたしが第三身分、平民の代表としてだがね。

カレーム　顔がおききになるということでしょう。

ミラボー　顔と言えば、君の顔を拝見するのは、確かにしばらくぶりだが、この舌ではずいぶん君と出逢ったぞ。

カレーム　ありがとうございます。

ミラボー　それから耳だ。師匠がウィーンに帰っている間、立派に代役を務めたらしいじゃないか。それから新しいお菓子。

カレーム　éclair au chocolat（エクレール オ ショコラ）ですか。

ミラボー　そのエクレアだ。

カレーム　シュー生地を細長く焼いて中にクリームをたっぷり詰めます。そこに上から、ああ覚えていますか、砂糖の衣、あれをチョコレートを混ぜて作ってかけてやる。

ミラボー　たっぷりのクリームがはみ出さないように素早く稲妻のように食べなくてはいけないから、エクレア、稲妻という名前がついたと聞いたが。

カレーム　最初に作った時、師匠が飲み込むみたいに食べましたんで。

ミラボー　・・・王妃様は、お食べになったかね。

カレーム　ええ・・・。一口だけ。

ミラボー　若き天才パティシエの最新作もだめだったか。

カレーム　美味しかったというお言葉は頂きましたが・・・。王妃様は、どんなお菓子をお食べになっても「甘い」と思わなくおなりなんです。

ミラボー　そのようだな。甘き菓子も、甘きを感ぜずば、傷んだ心の慰めにはならんか。

カレーム　ミラボー様。なんとかなりはしないものでしょうか。

ミラボー　わたしは未だに声もかけていただけない。間に合わなくならなければよいが。王の菓子職人、師匠は相変わらずかね。

カレーム　ええ。とても悩んでいるようです。ランバル夫人からその王妃様のためのお菓子を頼まれて。プチトリアノーンのアトリエにこもりっぱなしです。

ミラボー　いつかと同じような状況か。

カレーム　だいぶ深刻ですけど。

ミラボー　しかし、またメレンゲか。

カレーム　好きなんですよ。メレンゲが。
ミラボー　ほう。
カレーム　誰でも出来ます。そりゃ失敗する時もあるけれど、たいていはいつか膨らみます。それでいて、長く持たない、すぐに固くなってしまう。だから、毎回作るんです。(メレンゲを泡立てながら)こうしていると、これがいろいろなお菓子になるのが目に浮かんでくるんです。だから、好きなんです。
ミラボー　菓子職人がうらやましくなってきた。
カレーム　弟子入りには年をお取りになり過ぎです。
ミラボー　そうだな。わたしはわたしのやれることをやらなければいかん。
カレーム　そうだ。もう失敗はあまりなくなりました。忘れないように、全部書き留めてあるんです。分量や回数、その日の天気。全部。
ミラボー　そりゃいい。それはいつか役に立つだろう。
カレーム　でも、王妃様のこと考えると、お菓子の魔法も怪しくなって来ました。

オペラの音が聞こえる。

ミラボー　しかし、なぜ今「フィガロの結婚」など王宮を馬鹿にしたようなオペラを、王妃様ご自身がおやりになるのか。
カレーム　お寂しいのでしょう、王妃様。跡継ぎのご長男ルイ・ジョゼフ様がお亡くなりになって、まだ三月。あれほど華やかにお暮らしだった方が、閉じこもりっぱなしで、ようやくですから。
ミラボー　おいたわしいことだ。
カレーム　なにか起きるのでしょうか。なにか変わりそうなそんな不安があります。
ミラボー　アメリカでは、ジョージ・ワシントンが初代大統領に就任した。いってみれば、直接民衆が彼を選んだ。カレーム君。君は共和主義者かね。
カレーム　さあ。政治向きのことはよくわかりません。わたしは菓子職人です。菓子職人ですから、菓子を作るだけです。そして王宮に雇われている身ですから、王様や王妃様のためにお菓子を作るのです。それしかできません。

と、ランバル夫人登場。

ランバル　ああ、もう我慢できません。あのようなオペラ、たしかにお苦しみはわかります。しかし、あのようなもので憂さをはらさずとも・・・
ミラボー　ボンジュール。マダム。
ランバル　まあ。よくもまあ、こんなところにお顔を出せるものですね。ミラボー伯爵。
ミラボー　わたしは心からフランスの王室を敬愛するものですよ。ランバル夫人。宮廷女官長様。
ランバル　まあ、悔しい。もうわたしが女官長でないのを知っていて。

これは失礼を。諫言が過ぎたのでは？王妃様をご敬愛のあまり。

ミラボー　ええ。ポリニャック夫人のようにうまく取り入って、５０万リーブルもくだしおかれていれば、王妃様の評判はよくなったとでも。

ランバル　たしかに。王妃様は、あの純真無垢さによって、実にわかりやすい民衆の敵となりましたから。「あの女の浪費が、俺たちの朝飯を高くしている。朝飯に砂糖を」

ミラボー　いつかも、わたしを通して、王様と王妃様の様子を探るつもりだったのね。

ランバル　わたしは、立憲王制をとなえているんですよ。王室はそのままあったほうがいい。いきなり皆が今日から政治のことなど考えられるわけがない。ですからお近づきになって、お人柄を知りたかった。それなのに、なぜかこの望遠鏡は、わたしの手にある。ランバル夫人。お取り次ぎを頂いていれば・・・

ミラボー　王妃様は軽い男が嫌いなのです。

ランバル　手厳しい。

ミラボー　お顔も痩せた方が好みです。

ランバル　さらに、手厳しい。

ミラボー　ああ、可哀想な王妃様。あれほど愛らしく気高かったお方が・・・、お好きなお菓子も召し上がらないとか。

カレーム　ええ。あの王妃様が、どんなきらびやかな、絢爛豪華なお菓子を口にされても、まるで、砂を噛んでいるようだと・・・

ミラボー　財政の逼迫は、やはりアメリカの独立を支援したことによるでしょう。ただ、あれが痛かった。「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」

ランバル　まあ、形ばかりとはいえ、貴族のあなたまでが、そんなことをいうから、お可哀想なのです。

ミラボー　では、違うと。人は食べものの話をするときに、思わぬ本音をもらすもの、といいますが。

カレーム　お声をかけて頂いたときにはっきりこの耳で聞きました。おっしゃったのはこうなんです。「彼らは、ブリオッシュを食べるようになるだろう」

ミラボー　ブリオッシュ？　お菓子には違いない。

ランバル　「食糧難の際にはパンとブリオッシュを同じ値段で売ること」とフランス法に定められているのを存じないのですか。

ミラボー　なるほど。お菓子を安くされると。

カレーム　それから、ブリオッシュには違う名前があります。形が王冠に似ていることから、その名を『王の菓子』といいます。王妃様ははっきりおっしゃいませんでしたが、わたしはこうだと考えました。王の菓子を民衆が食べる。王のものを分け与え、それを皆で食べるのだと。

ランバル夫人泣く。

ランバル　あのお方はそういう方なんです・・・。

ミラボー　やはり、一度お会いしたかった。

ランバル　そうだわ。マシャロは。この国のパティシエはどこです？あなたの師匠。

カレーム　もう、あの方しか望みはありません。

ランバル　あ、はい、アトリエに。でも、もう少しお待ちください。まだ・・・

いいえ。いつまでかかってんだあ。せめて、せめて、お好きなお菓子を。

ランバル夫人、アトリエにかけ込もうとするが、マシャロがお菓子を持って出て来る。お菓子には白布がかかっていて見えない。

マシャロ　・・・

カレーム　お師匠様・・・

マシャロ　カレーム。話しておくことがある。

カレーム　はい。

マシャロ　おまえは手先も器用だ。そして新しい菓子も次々と生み出した。エ、エ、エクレア、ですか。

カレーム　あれは、うまい。

マシャロ　はい。

カレーム　だが、菓子とは、菓子職人が出来ることとは、それだけではない。見た目の美しさ、心躍る華やかさを兼ね備えた上で、なお、人が食するために作るのだ。

マシャロ　どういうことでしょう。

カレーム　わたしは、わたしが忘れぬために言っている。

と手元の菓子を見る。そしてそれをテーブルに置く。

カレーム　出来たんですね。

マシャロ　出来た。

カレーム　おめでとうございます。

ミラボー、ランバル、そっとのぞこうとするが、

ミラボー　触るな。これは王妃様のためのお菓子なのだ。王妃様のためだけの。

カレーム　師匠・・・

マシャロ　王宮の食料庫を空っぽにして、民にお菓子を分け与えるのだとしても、これは王妃様だけのものだ。カレーム。

カレーム　はい。

マシャロ　わしの菓子を皆様はいつもほめて下さった。「甘いわ」その度、わしはどれほどの喜びに身を貫かれたか。だが今は・・・。しかしこれならば・・・

ミラボー　その菓子に、名前を付けられましたか。

マシャロ　Tarte au Petit Trianon
カレーム　タルト オ プチトリアノーン・・・

マシャロ、テーブルの上のお菓子を覆う布を取ろうとする。
と、かけ込んで来るベルとサリー。

カレーム　ベル。サリー。
ベル　あ、カレーム。
カレーム　顔が真っ赤だよ。いったいどうしたんだい。
ミラボー　おお、マドモアゼル。実に久しゅうお目にかかった。
ベル　あなたは・・・
サリー　アラフォー様
ミラボー　そう。いったいぜんたいどうしたというんだね。ミラボーだが。
サリー　冗談いってる場合じゃないんです。
ミラボー　私は言っていない。
ベル　バスチーユが、バスチーユの牢獄が襲撃されたんです。
ランバル　なんですって。パリの東を守る要塞が・・・
ミラボー　しまった。早まったことを。様子は。
サリー　街でみんなが騒いでいて、
ベル　煙が上がっているのが見えました。

ミラボー、望遠鏡で見る。

ランバル　こうしてはおられないわ。王妃様のお近くに。それで、王妃様を王様のところにお連れしなくては・・・

ランバル、行こうとする。

マシャロ　いかん。いかんいかんいかんいかん。・・・これを、これをお届けせねば。とにかく。わたくしも参ります。

マシャロ、ランバル行く。

サリー　カレーム、どうなるの。
カレーム　わからない。
ミラボー　これは、もう止まらないかもしれない。
カレーム　え。
ミラボー　「どこしえのぶどうよ りんごよ そして蜂蜜よ 甘いおまえたちに世話にはなった そのことは忘れまい だが 感謝の心根が薄れていくのを許してもらわねばならぬ 新世界の始まりだ」行かなければならぬ。

カレームに望遠鏡をわたす。

ミラボー　会える日がくるのなら、また会おう。

カレーム　あ、これ・・・

ミラボー、行く。砲撃の音。革命の足音。残された三人、彼方を見る。カレーム、望遠鏡を覗き込む。

12

バーデル　カリブの島。森。儀式の音が遠くから響いて来る。銃を持ったバーデル登場。森への恐れは隠せない。突然、顔まですっぽり黒い服をまとった女が現れる。

ま、魔女だ。

女、消える。今度は別の場所に現れる。また消える。そしてまた別の場所に。

バーデル　許してくれ。頼む。なあ。そうだ。俺は、もうこの島からいなくなる。

女　ああ、いなくなるさ。帰るんだ。だから、なあ、頼む。頼むから・・・こんなところには何の未練もねえんだ、なあ・・・

バーデル　わたしを愛してる？

女　え。

女、男に近づく。

バーデル　わたしを愛してる？

女　・・・。(気がつき)おまえ・・・。

バーデル、女のフードを取る。女はアイダだった。

バーデル　さ、キスしておくれ、このわたしに。

女　・・・ああ。なんだよ、俺の可愛いチョコレートちゃん、驚かせるな。さ、キスしてあげよう。ああ、愛してるさ。

バーデル　嘘だ。

アイダ、いきなりナイフで男を刺そうとする。もみあい、バーデル、ナイフを取り上げアイダを後ろ手につかまえる。

アイダ　俺を刺そうとしたのか。俺を。

バーデル　ああ、そうだよ。

バーデル　この俺をなんだな。
アイダ　そうだよ。
バーデル　俺が死んだら娘はどうなる。可哀想だ。な、わかるだろ。

ナイフを首に当て。

バーデル　お前が死ね。
アイダ　・・・
バーデル　そうだ。お別れに砂糖菓子をやるよ。ほら。

嫌がるアイダの口に砂糖菓子を押し込む。

バーデル　甘いだろ。
アイダ　・・・
バーデル　砂糖菓子だぞ。ほら、甘いだろう。
アイダ　ちっとも、甘くないよ。

雷。雨。
バーデル、アイダを刺す。

バーデル　俺は、ほんとはクリームが好きなんだ、チョコレートちゃん・・・

アイダ、死ぬ。バーデルの耳に、戦いの儀式の音が激しい雨とともに響いていく。

13

カリブの島。森の奥。奴隷たちが集まっている。激しく太鼓や木を打ちならし祖先と精霊に祈る。稲妻が光る。ジェロームが、まず呼びかけた。

ジェローム　聞いてくれ。俺の話を。そして答えてくれ。今日はどういう日だ。
皆　砂糖みたいな日だ。
ジェローム　昨日まで俺たちは。
皆　砂糖を縛られたみたいだ。
ジェローム　俺たちは待った。機会を。待ち続けた。いや、先祖が海を越えてサメの腹を切り裂いて、この島にやって来た時から待ち続けた。だが、それは今だ。

大きな歓声が起きる。「今だ」の声。

ジェローム　海の向こうから男がやって来た。マカンダル。

マカンダルは威風堂々とした。

マカンダル　仲間よ。同じ祖先を持つ仲間たちよ。時はきた。われらに光をもたらす太陽を創造し、波を起こし、嵐を鎮める精霊は、雲の陰からでもわれわれを見守りたもう。精霊は我らの戦いを導き助けて下さるであろう。我らの涙の源である白人の神の象徴を捨て（十字架を捨てる）われらの胸の中に語りかけて来る自由の声に耳を傾けよ。

ジェローム　この島の先住民の生き残り。マボよ。精霊に伝えたもう。われらが思いを。

マカンダル　「砂糖の箱」がマカンダルによって捧げられる。白い服のマボ、砂糖を口に含み、精霊へ祈りの踊りを捧げる。

マカンダル　聖なる木マブーに宿る、霊界の門番、精霊レグバよ。白人の手によって殺された女の血を捧げます。

マカンダル　アイダが運び込まれ、その血が捧げられる。マボに精霊がのりうつる。

マカンダル　おお。精霊レグバよ。われらがために霊界の入口を開き、その深淵にして限りない力を与えよ。

マカンダル　霊界への扉が開かれる。

マカンダル　「砂糖の箱」がマボによって開かれる。皆に砂糖の小袋が分け与えられる。

ジェローム　今この甘き苦さを噛み締めるのだ。戦いの前に。

マカンダル　皆、砂糖を流し込む。

マカンダル　死を怖れるな。戦いの帆をあげろ。

マカンダル　「ソーソー　ヤイヤ　ラレフォー」が繰り返される。

マカンダル　戦いが始まった。

14

戦い。バーデルを襲うジェローム。銃で追いつめられるが、マボあらわれ、バーデル逃げる。ジェローム追う。マボ、逃げたと思ったバーデルに撃たれる。笑うバーデル。だが、マボは血も流れない。おののくバーデル。しかしエメー現れ、

マボを助けようとし、マボ行く。エメーかわりに撃たれる。
バーデル行く。エメー、倒れる。ジェローム来る。

ジェローム　エメー。

エメーの命は事切れようとしている。ジェローム、エメーを抱きかかえる。

ジェローム　エメー、大丈夫か。
エメー　…なんていうんだっけ？
ジェローム　え。なんだ…
エメー　わたし、わからなくなった。
ジェローム　なに、いってる。
エメー　(砂糖の袋を出し)ほら、哀しいとき、砂糖がなんだって、いうんだっけ…ジェローム。
ジェローム　…使わない、使わないよ、エメー。哀しい時の言葉に、砂糖は使わないんだ。
エメー　そうだっけ。おかしいわ…

エメー、砂糖を口に含む。

エメー　甘くない…
ジェローム　エメー、エメー…

ジェローム、エメーに砂糖を食べさせる。

エメー　あなたの味。甘い、今までよりずっと…、ゆっくり舌から伝わって…

エメー死す。

ジェローム　ソーソー ヤイヤ ラレフォー ソーソー ヤイヤ ラレフォー

ジェローム、再び砂糖を含む。雄叫びをあげる。銃声。後ろからバーデルに撃たれた。ジェローム死す。マカンダル現れる。二人の死を見た。怒り。バーデルを振り回す。首を絞める。バーデル、ジェロームとエメーに折り重なるように死ぬ。マカンダル行こうとする。撃たれる。撃ったのはテレマック。マカンダル死す。テレマック、バーデルの望遠鏡を奪い行く。マボ、「砂糖の箱」を持って現れ、死者に捧げ、天に祈る。

15

パレードのにぎやかな音が聞こえて来る。１７９４年。革命広場に近いパリの街角。フランスの前の景から五年後。カレームとベルとサリーがいる。カレームは望遠鏡をのぞいている。

サリー　にぎやかねえ。
ベル　うん。
サリー　革命政府が奴隷解放宣言をした記念式典のパレードですものね。
カレーム　青、赤、白の新しい国旗がはためいている。
ベル　生きていてよかったわ。
カレーム　ああ。

しばしの沈黙がある。

ベル　何千人も死んだのに。ギロチンで。王妃様も、あそこの広場で・・・立派な最後だって聞いたけど・・・
カレーム　師匠も・・・
サリー　仕方なかったのよ。そう思う。わたしたちだってプチトリアノンで働いていたから危なかったじゃない。五年も身を隠して。
ベル　ねえ、どうするの。
カレーム　なにがだい。ベル。
ベル　だってあなたを雇ってくれていた人はもう死んじゃったんだから。どうするの、これから。
カレーム　お店を出すよ。このパリで。
サリー　お菓子屋さん。
ベル　ああ、サリー。
サリー　王様や王妃様が食べていたお菓子を、パリの町で？
ベル　ベルは知ってるだろ。僕は、この五年間ずっと研究し、書き留め、お菓子の本を書いて来た。それは、そのためなんだ。
サリー　ええ、知ってるわ。
ベル　まあ、あんたたち。わたしも、結婚するわ。
カレーム　まあ、お相手はだれ？
サリー　まだ、いない。でも、きっとじきにみつかるわ。それで子どもを作るの。それから、わたしは、その子どものためにお菓子を作るの。メレンゲのお菓子。
ベル　ねえ、本にはのっているの。
サリー　なに？
ベル　Tarte au Petit Trianon（タルト　オ　プチトリアノーン）
カレーム　・・・
サリー　結局、王妃様はあのお菓子をお食べになったのかしら・・・

ミラボー登場。

ミラボー　ボンジュール！マドモアゼル ウイ ムッシュ。
サリー　ああ。アラ、
ミラボー　ミラボー、です。若き天才パティシエ、ようやく陽の当たるところに現わるか。どうするつもりかな。
カレーム　はい。やはり菓子職人は誰かのために仕えるのです。僕は、これから民衆に仕えます。みんなが喜び幸せになるお菓子を作ろうと思うんです。あ、それからこのベルにも仕えます。
ミラボー　それはそれは・・・。いや恐悦至極。また君の味にこの舌が出逢えるとは。
サリー　ミラボー様。
ミラボー　なにかな。
サリー　王妃様は、お食べになられましたか。
ミラボー　・・・
サリー　そして、心すこやかに、心すこやかに・・・
ミラボー　タンプル塔に幽閉された王妃様はご立派だった。毅然とされていた。牢獄では出される食事を残さずたいらげていたそうだよ。
カレーム　それでは。
ミラボー　お食べになったよ。王妃様は。王の菓子職人が最後に作ったあのお菓子をね。
カレーム　どういう、どういうお菓子だったんでしょう。知りたい。師匠が作ったのは・・・
ミラボー　「触るな。これは王妃様のためのお菓子なのだ。王妃様のためだけの。」師匠の言葉を忘れたか、若き天才パティシエよ。
カレーム　しかし、わたしは知りたい。
ミラボー　あれは王妃様のためだけのお菓子だったんだ。王妃様は不幸ではあったが、幸せだったろう。
カレーム　・・・

祝砲が撃ち上がる。

ミラボー　君主の時代は終わった。奴隷解放宣言はその象徴だな。
サリー　あの三色旗の下には、バラ色の未来があるのね。自由、平等、博愛。
ミラボー　わたしたちにも。
ベル　とばかりも限らぬ。バラ色の未来か。皆が、例えば王妃様のようなお暮らしをされる日が来るのだろうか。
そんなこと、考えられないわ。

また祝砲が打ち上げられる。

ミラボー　わたしは現実主義者だ。理想への歩みははるか遠いことを知っている。今、ここで、やれることをやるのだ。猜疑と後悔と己の無力さと運命

サリー　に苛まれながらな。いかん。式典に遅れる。
ミラボー　式典でなにかお役をするの？
ベル　重大な役目がある。解放宣言を読み上げる、
サリー　まあ。
ミラボー　すごい。
　人に、宣言書を渡す役だ。会えるのなら、また会おう。

ミラボー行こうとする。

カレーム　僕はお菓子しか作れません。
ミラボー　いいじゃないか。いつか君にもいった。弟子入りしたいくらいだ。パティシエ。お菓子を作れ。砂糖が安くなったのは、たしかに彼らのおかげだ。だが、君に出来ることはなんだ。
カレーム　はい。お菓子を作ることです。
ミラボー　羨ましいぞ、菓子職人。お菓子はいい。なんといっても、甘い。「おー甘き菓子よ おまえはどうして甘いのか 砂糖が入っているから 口が聞けるのならそう答えるだろう 砂糖、おまえははまさしく理想的だ。日常生活の慌ただしさを和らげ、休息時には疲れを癒し、休息から仕事へ、また仕事から休息へ、わたしたちの一日をスムーズに おお、甘き菓子よ おまえは立派だ」みんなに食べさせてやってくれ、おまえの甘き菓子を。
カレーム　はい。それが望みです。
ミラボー　必ず店に行こう。さらばじゃ。わたさねば。
カレーム　あ、これ。(と望遠鏡)
ミラボー　開店祝いには早すぎるかな。
カレーム　店に飾ります。
ミラボー　それはいい。それで、遠くまで見通してくれ。おまえのお菓子の行く末と、この先、この新世界がどうなるのかをな。甘き世界が訪れることを共に祈ろう。

ミラボー行く。

カレーム　本に載せるよ。
ベル　え。
カレーム　そこには、こう書かれている。かつてこの菓子は貴婦人の心を救ったものである。しかし、そのレシピはここに書き記すことはできない。分量も材料もわたしは知らぬからだ。だが、それは、わたしたち菓子職人を奮い立たせる。菓子は人が食するために作るのだ。では人が食するとはどういうことか。人が食するために作るとはどういうことか。それを考えさせるのだ。だから、この菓子の材料や分量、そして細かい技法は、それぞれの菓子職人が考えなければならぬ。わたしが知っているのは名前だけ。それは、王妃様のためのお菓子、

Tarte au Petit Trianon

楽隊の演奏が始まる。

サリー　式典が始まったわ。

カレーム、ベル寄り添った。望遠鏡が遠い未来を映し出した。

15

マンションの一室。宇山と涼子。深夜。二人の前には、白い、真っ白なタルトが置かれている。それから本。

涼子　・・・あの時と、初めて会った時と同じだね。白いタルト。

宇山　・・・うん。考えてみれば、それしかなかったんだ。

涼子　出来たの。

宇山　出来た。簡単なことだったのかもしれない。

涼子　そうか。

宇山　まず、メレンゲを泡立てるんだ。

涼子　うん。

宇山　よく洗ってきれいに拭き上げたボールに、卵白三つ分を泡立てる。９０ｇの粉砂糖を三回に分けて入れながら。卵は、時間が経ってなきゃだめなんだ。(少し笑いながら)腐りかけ寸前、なんていう。

涼子　うん。それから。

宇山　クリームオブタータっていうのを入れなきゃ。泡立った白味をしっかりと固めてくれる。元々ワインの澱に含まれてる。

涼子　(うなづく)

宇山　このお菓子には絶対必要なんだ。泡が全体に白くたったら、最後の砂糖を入れて、固く泡立てる。角が立つ。絞り器に入れて、タルトの形を作る。

実際には持っていない絞り器を持っているように、直径７～８センチの円を描き、さらにもう一段縁に沿って円を描く。

宇山　できた。天板をオーブンに入れて、１４０度で６０秒、１００度で１時間５分焼く。ああ、これは今日みたいな寒い日。

涼子　うん。

宇山　焼き上がったら、ほんの少しオーブンのふたを開けて、ゆっくりゆっくり何時間かかけてさます。

涼子　うん。
宇山　本物の生クリームを泡立てる。冷めたメレンゲのタルト台の上に絞り出していく。

と目の前のタルトになる。涼子、宇山、タルトを見る。

宇山　初めて会った日、うちにある材料でできるのは、これしか思いつかなかった。
涼子　・・・時間がかかるお菓子だったんだね。
宇山　涼子はきっとお腹が空いていて、それでこんなところにきちゃったんだろうから。もっと早く涼子が食べられるものを作れば良かったよ。
涼子　・・・そんなことないよ。
宇山　さあ、食べてくれ。

涼子、食べようとするが、胸がつまり食べられない。

宇山　これ、店では出せないお菓子なんだ。
涼子　え？
宇山　焼いたメレンゲは、クリームをのせた瞬間から溶け始める。だから並べておけない。
涼子　あたしのために作ってくれたんだね。
宇山　ああ。
涼子　・・・そうだ、嬉しかったんだ。あの時・・・、この人はあたしが食べられるものを作ってくれた、あたしも、これを食べて生きていていいんだ・・・。あなたは生きていていいんだよ、そういってくれた。だから、あたしここにいたんだ。
宇山　食べなよ。
涼子　いいの？
宇山　ああ、いいよ。俺に出来ることはこれだけだから。

涼子、タルトを食べる。

宇山　メレンゲのタルトだよ。
涼子　ちゃんと覚えてた・・・あたし、覚えてた。この味。
宇山　甘い？
涼子　甘い・・・、とても、とても。あなたの味。あなたの甘さ。
宇山　初めて会ったときは甘くないっていったじゃないか。でも、よかった・・・

二人見つめ合う。涼子、ゆっくりと立ち上がり、箱の砂糖を口に含む。

涼子　・・・舌の先のほうに、あたたかいものが、とても強く、でもとても優しく・・・、それからゆっくりとゆっくりとわたしの頭の中にやってくる・・・ああ、甘い・・・甘いって、こういうことだったのね。

涼子、男を見つめた。

宇山　ほんとにわかったのか。

涼子　・・・。

宇山　甘いの。

涼子　やっぱり、あなたの仕事は世界一幸せなお仕事だね。

宇山　俺は、魔法使いだから・・・これからも。

涼子　本当にありがとう・・・今まで。

宇山　やっぱり行くのか。

涼子　うん。

宇山　涼子。俺は自分には魔法はかけられないんだぞ。

涼子　一緒にいられればよかったね。あなたの「甘さ」とわたしの「甘さ」が同じなら良かったね。

宇山　・・・

涼子　お店に行くね。きっといつか。(望遠鏡でのぞいて)赤いのや白いのや黄色いのや緑色、黒いのもあった。あなたのお菓子を、みんなが喜んで食べて、それをまた喜んでいるあなたのお菓子を、きっとわたしも買うわ。

宇山　どこへいくつもりだ。

涼子　(答えず)いつか、きっとよ。

宇山　わかった。

二人の別れである。

女、出て行く。「砂糖の箱」と望遠鏡が残されていた。男、立ち上がり箱の砂糖を口に含む。気づいて望遠鏡をのぞく。が、やがてそれをおろし、泣いた。大きな声で泣いた。

白い純度の高い砂糖が、一筋、天上から長く、いつまでも降り注いだ。

了

《主な引用・参考文献》他、たくさんのサイト、たくさんの、お話を聞いた方々。

・味の何でも小辞典（日本味と匂学会）
ブルーバックス
・「砂糖は太る」の誤解ー価額で見る砂糖の素顔（高田　明和）
ブルーバックス
・プリンに醤油でウニになる　味覚センサーが解明した仰天の食の謎（都甲　潔）
サイエンス・アイ新書
・旨いメシには理由（わけ）があるー味覚に関する科学的検証（都甲　潔）
角川ONEテーマ21
・味覚と嗜好（伏木　亨）食の文化フォーラム
・コクと旨みの秘密（伏木　亨）
新潮新書
・人間は脳で食べている（伏木　亨）
ちくま新書
・砂糖の世界史（川北　稔）
岩波ジュニア新書
・味覚障害とダイエットー「知られざる国民病」の処方箋（富田　寛）
講談社プラスアルファ新書
・糖尿病患者のためのカーボカウント完全ガイド（板根直樹・佐野喜子）
医歯薬出版株式会社
・概説　ラテンアメリカ史（国本　伊代）
新評論
・ハイチの栄光と苦難ー世界初の黒人共和国の行方ー（浜　忠雄）
世界史の鏡
・カリブからの問いーハイチ革命と近代世界ー（浜　忠雄）
世界歴史選書
・略奪の海カリブ　ーもう一つのラテンアメリカ史ー（増田　義郎）
岩波新書
・料理の仕事がしたい（辻　芳樹）
岩波ジュニア新書
・私は黒人奴隷だったーフレデリック・ダグラスの物語ー（本田　創造）
岩波ジュニア新書
・アフリカの心（エンダバニンギ・シトレ）
岩波新書
・カリブの女（ラフカディオ・ハーン）
河出書房新社
・マリー・アントワネットとベルサイユー華麗なる宮廷に渦巻く愛と革命のドラマ
別冊歴史読本
・甘さと権力　砂糖が語る近代史　シドニー・W・ミンツ
平凡社

○この作品は、著作権法で守られています。作者に無断の上演、掲載はお断りします。
作者連絡先　info@promstage.com